

## 今度ははっきり言えた

道を引き返し、駅に向かった。

神社の境内の木陰にぐったりと座りこむ。

「ずんずん彼女が僕から離れてゆく様に感じ、  
悄然たる様子だった。」

結局、四時間ほど歩きまわった。

大変、自分ながら情け無い気持ちになった。

境内の木陰で木にもたれながら僕は思い出していた。

この間の、三条京阪のバス停で、  
一点をじっと見ながらベンチに座っている彼女の、  
その姿を、僕は思い出していた。

そばの境内の石段に、彼女がその姿で座っているのを、  
僕は想像した。

彼女が毎日、この神社のそばを、駅に向かって、通学する姿を、  
僕は想像した。

「これが、彼女が生まれ育った八幡町かあ。」  
ふと、僕はそう思った。

そう、思うと、  
今まで暗かった僕の気持ち  
急にパッと、明るくなった。